自分だけの秘密

詩斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
自分だけの秘密

【Ｎコード】
Ｎ３６０６Ａ

【作者名】
詩斗

【あらすじ】
なにもかもを“私なんかじゃ無理”と諦める恵美。そんな彼女にライバルが現れて……

前編

「ほら、恵美ってばなに血迷ってんの！　さっさと告らなきゃもってかれちゃうよ！」
そういう麗子の言葉を、私は、ただぼんやりと聞くしかできなかった。

［自分だけの秘密：前編］

いくら苦しくっても、いくら辛くっても、時に原因となるモノを打破したり、解決しようとする気にはならないことはある。例えば大好きな人に彼女ができるかもしれないという噂を聞いた時。
その人のことが大好きだけど、綺麗ではきはきとした性格の男女問わずに好まれるライバルが現れた場合。自分と彼女を見比べてしまい、どうしたって自分の方が格下だと受け入れざるを得なくて、小さく縮こまるしかできなくなる。大好きな人に彼女ができればとっても辛い。とっても悲しい。だけど、そんな状況下で自分にはなにができるのだろうか。もちろん麗子のいうように、彼女より先に告白するという手もある。結果は、まぁこちらの望みどおりになるとも思えないけど。
今年で１６歳になった私、鈴木恵美には大好きな人がいる。同じクラスの冴田良樹くん。中学校の校区は別々で、彼と知り合った、というか彼の存在を知ったのは入学式終了直後。これから１年間お世話になる教室でクラスメイトとなる子達と担任の登場を待っていた時だ。新しい環境に緊張してか、誰もの息遣い以外音のしない教室で一番最初に声をあげたという非常に勇気のある人物である。
彼はまず教室内をぐるりと見渡し、これみよがしにため息をつい

た。席順は出席番号で決められていて、私は幸運にか不運にか彼の隣であったから、隣から聞こえてきた大きなため息にまずびっくりした。大げさなほどに身体をびくりと震わせ、恐る恐る音のほうへと顔を向ける。ばっちり目の合ってしまった私は大急ぎで顔を背けたけれど、それを見逃すような人じゃない。

「ね、あんた、名前は？　俺は冴田良樹ってんだ。しばらくは隣同士だろ、仲良くしよーぜ」

当時から、正直に言うときっと幼稚園あたりから私は少なからず対人恐怖症の気を持っていて初対面の人とはまともに話すら出来やしない。それが私にとって大きなコンプレックスとなっていたわけだけどこの時も、いくら気安げに話しかけられても呆然と彼をみつめたまま声を出すということができずにいた。

「なに、入学式だからって緊張してんの？　肩の力抜けって。どうせみんな同じように緊張してんだから、弾けた方が高校デビュー成功ってことになるんじゃねーかな」

あっはっはと豪快に笑い続ける冴田くんの周りのクラスメイトは恐る恐るというように彼に話しかけ、彼はそれに返し、遅れてすまんと謝りながら担任が駆け込んでくる頃にはすでに教室中が話し声や喚き声に包まれていた。

環境は、私には考えられない速度で変わっていく。急速に友達になっていくクラスメイトについていけず気後れしていた私を輪の中に引っ張り込んでくれたのも冴田くんだった。

1人ぽつんと座る私の傍まで来て、べらべらと話していく。私は相槌を打つことで精一杯で、満足に言葉を返せない。だけどいつの間やら私たちの周りにはクラスメイトが集まり、いつの間にやら笑い声で包まれている。毎日がそんな感じ。いつしかクラスメイトにも慣れ、今では麗子と言う親友とも呼べる存在にまで恵まれることができた。いつのまにか対人恐怖症の気もなくなって初対面の人ともなんとか無難には話せるまでになっていた。

で、――冒頭の台詞。

＊　＊　＊

「ちょっと恵美聞いてんの？　あのね、夢を見るのも結構だけど、現実には勇気を振り絞らなければならないって時があるのよ。そこらへんちゃんとわかってんでしょうね」

頭では理解していても、それを行動に移せないのが私という存在だ。麗子は正しい、けれどどうしても自分から動き出すことはできなかった。思考は空回りし、意識は自分がなにをしているのかさえ理解できないほど危うい。

自分がここまで混乱している現状にも驚きだけど、もっと驚きなのは自分がここまで冴田くんを好きだったのかということだった。

事の起こりは1時間前。少なくとも、私にとっては。

6時間目も終わったことだし今日は早く帰ろうと思っていた私は、それでもゆっくりと帰宅の準備をしていた。そこに舞い込む一陣の風……と思ったけど実際には麗子が風を撒き散らしながら走りこんできた。所属しているバスケ部に行ったんだろうと思っていた私は彼女の出現に驚いた。なんでこんなとこにいるのかを尋ねようとした私に、麗子が荒い息のまま早口で継げる。

『陸上の川内さんが冴田くんのこと狙ってるって！』

最初は左の耳から右の耳へとすり抜けていった。だけど、徐々にその言葉が脳に浸透するにつれ私は脱力し、ぺたりと椅子に座り込む。そんな私に麗子は勇気を奮い立たせようといろいろ言ってくれている最中らしい。

冴田くんを狙っている女の子がいる。そんな噂が流れ始めたのはここ最近の出来事らしかった。基本的に私は麗子と一緒にいることが多く、他人の噂話が嫌いな麗子と世間に疎い私とが旬な話題を伝え聞くチャンスなんて滅多にない。それでもこんなに早く知ること

ができたのは、ひとえに麗子の人格のおかげだろう。
情の厚い麗子は、私が密かに冴田くんを想っていることを知っている唯一の人物である。彼女は確かに噂話が嫌いだ。だけど彼女は冴田くんと、誰かはわからないけど綺麗な女の子が仲良く話しているのを見て、世間のことに疎い私のためにわざわざ噂を集めてきてくれたのだ。ちなみに噂を麗子に教えてくれた女バスのメンバーは、冴田くんが川内さんに落とされるのも時間の問題だ、と言っていたらしい。
「えー、と」
「このまま自分の気持ちを伝えないで終わるの？　可哀相じゃないのあんたの気持ちが！」
可哀相、という言葉が耳について離れない。なにも言えない私に愛想をつかしたのか、麗子はその言葉を最後にバスケ部の練習に戻ってしまった。私も、いつまでもこのままじゃ埒があかないからと、今はカバンを両手に持って通学路を歩いている。自然と視線は下がり、足元を見ながらの下校となった。
そういえば最近冴田くんとあんまり話をしてない。もちろんそれは私が帰宅部で彼が新聞部ということにも関係しているだろう。会える時間が極端に少ないのだから。冴田くんは放課後になると同時に部室へと走り出しているし、この間の席替えで隣同士という特権も効力を失った。
予感は、あったのだ。なんていうのかな、冴田くんくらい素敵な人を他の女の子が放っておく訳がない。いずれは来るだろうと考えていたことが、今日来ただけ。特に思うことはない、はずだ。
私は少し夢を見すぎていた。対人恐怖症気味で口下手な私。制服も無難に着こなし、髪は今時珍しく真っ黒。ちっとも細くないし、運動もできない。賢くもないし。総合的に評価して、地味。どこにでもいるような人間。人目をひくことなどない私が、冴田くんに選ばれるわけないのよね。
物思いに耽りながら歩いていたら道に迷ったようだった。いつも

と同じ通学路だからといってぼんやりと歩いていたのが不味かったのかも。いつのまにか私は暗い裏路地に入り込んでいた。
ここはどこだろう、来たこともない道だ。全体的に狭くて薄暗くて、なんだか怖い。早く抜け出さないと。気ばかりが急いて身体は動かない。そんな自分に余計に焦ってしまい、半ばパニックになりながら走りだそうとした途端。私はなにかにつまづいて豪快にこけてしまった。
「……ったぁ、鼻打ったぁ」
むくりと起き上がり、鼻をさする。そこまで痛くはないから大きな怪我はしていないだろうけど、ただでさえ地味な顔を強打……。これで鼻が縮んだらどうしてくれよう。世の中なにがあるかわかんないって本当ね。
カバンからコンパクトミラーを取り出して傷がないかをチェックする。擦り傷も切り傷も発見できず、鼻血も今のところなし。ちょっと赤くなっているくらいだから心配なんて要らないだろう。まぁ、ちょっと痛いけど。ちょっとっていうか、かなり痛い。
突然前の方からかすかな笑い声が聞こえてきた。今の醜態を見られたかと慌てて逃げようとしたけど、時すでに遅し。
「ああ逃げなくても大丈夫大丈夫。別にとって食ったりはしないからさ～」
「ってあの、ちょっと貴方！　腕、はな、離しなさいっ」
敵に背を向けてはいけない。それが本日の学びだ。例えば背を向けた途端に敵に背後から襟首を捕まれ抗えないほどの力で引き摺っていかれる。なーんてことが起こり得るのだから。

＊　＊　＊

私は敵……ではなかった、宗谷康博と名乗る人物に引き摺られ、

薄暗い裏路地のさらに奥にある意外にもこじゃれた喫茶店で傷の手当てを受けていた。私がざっと見た限りでは傷なんてなかったと思ったけど、消毒液を塗られた瞬間ピリリとした痛みが走ったからきっと小さな傷はついていたんだろう。

「あてっ。宗谷さんもうちょっと丁寧にお願いします……」

「なーに甘えたこと言ってんの。丁寧にやろうが乱暴にやろうが痛いのは同じだろ？　それならさっさと痛い消毒をしちゃうほうがいーじゃんよ」

「確かに理屈ではそうなりますけど、あたっ」

「我慢我慢。はい、これで終了。仮にも女の子なんだし鼻の頭にバンソコ貼るなんて嫌だろ？　乾くまでウチでゆっくりしていきな」

「うー……ありがとうございます」

見た目２３歳くらいに見えて実は３０歳近いという素晴らしい童顔を持っている宗谷さんは、若い身空でこの雰囲気のよい喫茶店「キャセルロット」を１人で切り回しているそうだ。なんでこんな所で喫茶店を開いていられるのだろうと思ったけど宗谷さんのいれた紅茶は本当に絶品で、きっとこの紅茶を飲むために常連になって通うお客さんが大勢いるんだと思う。もちろん今は私以外誰もいないけど。

うるさくならない程度にボリュームの絞られた洋楽が耳に優しい。紅茶の余韻と重なって、とてもゆったりした気分になった。なんていうか、家にいるくらいにリラックスできたんだと思う。拙いながらも私は、今日大好きな人に告白せずして振られたという出来事を宗谷さんに話していた。

「……で？」

「“で”？」

ぽつりぽつりと詰まりながらも話す私に宗谷さんは一切口を挟まず、グラスを磨きながら相槌を打って聞いてくれていた。そして話が佳境に入り私みたいな地味な子は選ばれないと締めくくると宗谷さんは、目をキラリと光らせながらそう言った。

「で、とは、どういう意味でしょうか」
「それでお前は今後どーしようと思ってんのかって聞いてんの」
「ああ。諦めますよ。川内さんは可愛いから、私が勝てるわけないし」
「……」
「宗谷さん？」
「だあああああああああああ！」
グラスを磨いていた腕を止めていきなり雄叫びを上げ始めた宗谷さんを、私は止めることもできずにただ唖然として見詰めるだけ。ひとしきり叫んで満足したのか、宗谷さんは息をついて呼吸を整えながらこちらを向いた。なんていうか、まとっている雰囲気がとっても怖い。口元は笑っててても、目元はとても真剣だ。
「なぁ恵美ちゃんさぁ」
「は、はい」
「その考え方、なに？」
「は？　考え方って」
「自分なんかが勝てるわけないってふざけたこと言うのも大概にしやがれこの馬鹿娘がっっ。努力もしないうちからなに諦めてんだよ普通好きな人とかできたら頑張って頑張って相手にも好きになってもらおうってすんだろそれをしないうちから諦めて『ああやっぱり私なんか選ばれない』だとふざけんじゃねーっつーの！！」
一息に言い切り息を切らす。私は突然怒鳴られたことに驚くだけだったけど、麗子のときと同じ。頭の中に今の言葉が沁み込んでいくにつれて今回は怒りがむくむくと沸いてきた。
「なんでそんなこと宗谷さんに言われなきゃなんないんですかっ」
「お前が馬鹿だからだろばーか！　川内ってやつがなんにもしないうちにそこまで噂が流れると思ってんのか？　そいつは努力してっからそこまで噂になるんだろうし、そこまでされれば男なんてもんは一発で落とされんだよっ」
「だから私なんて努力しても無駄だって言ってるでしょ！」

「ああそーだな。元からそんな考え方してるやつに努力しろなんて言っても無駄だよな！」
「……失礼しますっ」
私はこれ以上宗谷さんの言葉を慎んで拝聴していられなくてカバンを掴んでキャセルロットを飛び出した。勢いはそのままに家までの道をひた走る。怒鳴りあいになる前にキャセルロットの場所を大まかにでも聞いておいてよかった。少し行ったところを右に曲がるともうそこは駅前の大通りだ。周囲の目なんて気にしてられない。精一杯に走り続け、ようやく家にたどり着いた。
カバンから鍵を取り出してがちゃがちゃと乱暴にドアを開ける。2階へとかけあがって自分の部屋と飛び込んだ。カバンをベッドに放り出し、自分もついでとばかりにベッドに飛び乗った。手近にあった青いクッションを掴み取り殴り始める。我慢していたものが抑えられなかった。私はいつのまにか泣いていた。
「なに、なに、なんなのあの失礼な人っ。最悪！」
失礼だ、最悪だ、そういいながらも、どこかに宗谷さんの言葉に納得している自分がいる。

後編（前書き）

真ん中で一度視点が恵美から宗谷にいれかわっています。

後編

［自分だけの秘密：後編］

次の日、私はいつもより３０分ほども早く登校した。教室の自分の席に座り待っていると、遅刻ぎりぎりという時にやっと麗子が走りこんできた。女バスの朝練があったからこんなに遅くなったのだろう。でも、そんなの別に構わない。

麗子が自分の席に着き机にカバンを下ろすと同時に、私は麗子の右腕を掴んだ。

「……恵美？　おはよう。どうしたの」

「麗子チャン。ちょっと付き合ってもらってもよろしいかしら？」

この時の私は勝気な麗子が怯むほど目を据わらせていたらしい。焦りながらも頷く麗子を教室から連れ出し、教室のすぐ隣にある階段を上がって屋上へと飛び出した。

空には雲ひとつなくて、おまけにさわやかな風が吹いている。天気予報いわく“１０年に一度あるかないかの快晴”だそうだけど、私の心の中はそれと１８０度違うドロドロとしたものだった。

とりあえずは昨日の謝罪から迷って鼻を擦りむいた事や感じのよい喫茶店を見つけた事、だけどそこの店主がひどいやつだと言う事、初対面で喧嘩した事、帰って泣いてしまった事、そういったこと全部を麗子に話す。麗子は陽気な日差しから促される眠気を必死で抑えて聞いてくれた。

「で？」

「“で”？」

一気に話して息の切れた私への麗子の一言は、とっても宗谷さんに似ていた。だけど私も馬鹿じゃないから麗子の言いたい事はわかる。

「泣いちゃったの、なんでだかわかった？」
人の話を聞いているんだか聞いてないんだか、欠伸をかみ殺しつつ睡魔と闘っているだけのように思っていたけど意外と麗子は話を聞いてくれていたようだ。物事が一気に確信へと迫る。私も、それが一番話したかったのだ。
「……宗谷さんが言ってたように、私は今まですごくネガティブな人間だったなーって。心のどこかではきっと気付いていたんだけど、認められなかったというか。人にばれないように一生懸命隠していた部分を宗谷さんにつつかれて、一気に現実を見せられて、自分が情けなくなって泣いてしまった……かな」
本当はわかっている。私みたいな暗い考え方をしている限り、なにもかもが下降して行くだけしかないってこと。キラキラ光ってるみんなは、それに見合うだけ努力をしているんだってこと。麗子だって一番にバスケを頑張っているから、こんなにも私にはキラキラして眩しく見える。私には今までそんなに頑張ったことってあったかな。
「――あるわけないのよね。努力するのはさ、力が要るじゃない。越えてかなきゃいけない、しんどい事だっていっぱいあるでしょ。それに比べて“自分は無理だ”“自分はできない”なんて言っちゃうとさ。そこから動けなくなる。言うだけなんて簡単だもん。悲劇のヒロインぶってりゃいいわけよ。どうかこんな可哀相な私を助けて、てね」
「……そうだねー。正直、私から見て恵美は悲劇のヒロインぶってるとこがあって、それがすごい気に食わなかった。それでもいいところだっていっぱいあるから、今まで何も言わなかったけど」
「なーに、麗子。そんなこと思ってたんなら言ってくれればよかったのに。直した……かどうかはわかんないけどさ」
「いや。きっと昨日までの恵美なら言ったってなんも変わらなかったと思うね」
「じゃ、今日は？」

「自分で気付けたんだから、答えなんてわかってるでしょ」

この話はここで打ち止め。優等生の2人が生まれてはじめてのサボりってのをやらかしたんだから、やりたいことは他にもいっぱいある。いろんなこと、今まで話そうとしなかったことを、暖かい日差しを浴びながらめいっぱい話し込んだりね。

とりあえずは今日、自分の決意というか考えを麗子に話すことで、まずは自分を追い込んでみたんだ。私がまた後ろ向きに考え始めたら、きっと麗子が叱咤してくれる。これだって、たいした進歩だと思わない？

＊　＊　＊

カラン……とドアの開けられる音がして、俺は振り返った。驚いたことに、ドアの前には先日俺の目の前で大げさに転倒してくれちゃって数年ぶりと思うくらい思う存分笑わせてくれた鈴木恵美チャンがいる。あれだけ怒鳴りあったのだから二度とこの店には近づかないだろうと考えていたのに、なんの用だ？　さては忘れ物でもしたかとあの日の閉店作業を思い返すけど、別にお客の忘れ物なんて見つけた記憶はないからそれもきっと違う。じゃあ、なんの用だ？

「……なんでそんな不審な顔して見るんですか宗谷さん」

「いや、ってかフツーそうだろ。あんだけ気まず～い別れ方したんだからさ、二度と来ないって思うのがフツーじゃね？」

「んー、確かにそう考えるのが普通かもしれませんね。あ、アイスミルクティください」

堂々とカウンター席に座ってくるし。なんだ？　こいつ本当に鈴木恵美チャンかってくらい印象が違うっていうかなんていうか。ああ、そうか。

「さてはお前フラれただろ」
「お黙りくださいませんか宗谷さん」
「スミマセン……」
大人しく黙って湯を沸かす。恵美チャンも話はしないから、しばらくの間は俺の好きな洋楽アーティストの曲だけがこの空間を支配する。なんだか緊張しちゃっていつもより丁寧に紅茶を入れる。磨き続けたグラスに注いで、プレートにミルクと砂糖も一緒に乗っけて恵美チャンの前に差し出した。
恵美チャンは可愛らしくこくり、と一口飲んでにっこり笑う。
「やっぱり宗谷さんの紅茶は絶品ですねぇ」
「そりゃどーも」
話すこともなかったので、とりあえず日課のグラス磨きをはじめた。こんな奥にある店なんかに来るお客は知れてるから、やることがそれしかないって言ったほうが正しい。
３つ目のグラスを磨き終えて４つ目のグラスを手に取った時、恵美チャンがぽつりぽつりと喋りだした。
「あのねー……私、冴田君にフラれたんですよー」
「やっぱりね」
「違います。ちゃんと告白して、フラれたんです」
おっと危ない。もう少しでグラスを落として割るところだったあっはっは。まいったなーこれはかの有名な某焼き物家が特別にガラス細工をしてくれた由緒正しき
「現実逃避しないでくれます？」
「スミマセン……」
俺はついつい目の前に座っている恵美チャンを見てしまった。よく見れば目元は赤く腫れているし、よく考えてみれば今は平日の午前中だ。学生が来れる時間帯じゃない。思わず笑いそうになってしまって、口元を引き締めるのに苦労した。
目の前にいるこの子はあの“自分なんかが選ばれるわけないじゃない”と泣き言を言いまくって人の怒りの琴線に触れてくださった

腹立たしい子なんかじゃない。
「そっかー……。フラれちゃった、か。お疲れさん」
泣いてる子には敵わないってよく言うよな。今の恵美チャンは泣いてなんかいないけど、お疲れっていう意味を込めて昨日仕込んでおいた宗谷康博スペシャルケーキを多めに切り分けて紅茶の乗っているプレートの隣に沿わすように置いた。
「私別に頼んでませんよ」
「子どもがそんなこと気にしないの。これは恵美チャンへ。頑張ったで賞ってやつね」
「あ、りがとう」
わくわくとしながら恵美チャンの第一声を待つ。案の定、恵美チャンはスペシャルケーキを一口飲み込んだ途端に美味しい、と呟いた。
「よっしゃ！　今回のケーキも成功～♪」
「成功？」
「成功ー！　今日のはヨモギとコオロギとカエルの油と、っておい吐くな吐くな冗談だから」
「ふざけた冗談いわないでくれないですかねっ！！」
「やだー。恵美チャンたら怖～い」
「……死にたいですか宗谷さん」
「すみませんでした」
これ以上フラれたことにもケーキのことにも話を向けないことにしておこう。と、思ったのだけど。恵美チャンは俺が信用してないって思っているのか告白した時の状況を細かく話してくれた。
情報によると、川内って生徒が冴田を落とそうとしていたっていうあの噂は事実だったようで、結局のところご両人は早々にくっついてしまったようだ。それは恵美チャン自身が走り回って得た情報らしくて、知った上で冴田に告白したらしい。もちろん冴田は彼女ができたからって断ったようだけど。まぁそこで承諾するような軽薄な男なら生きている価値なしってことでこの俺が直々に潰しにい

ってやったんだけどな。とまあそんなことを、涙ながらに教えてくれた。
「顔は酷いし声はガラガラ。学校行く気がしなくって。格好悪いなぁ私」
口ではそういってるけど、表情はさっぱりしてた。
「行く気がしないんなら今日は１日ここでゆっくりしてけば？　どうせ学校関係者なんてこの時間に来るはずないんだし、ほら。濡れタオルで冷やしてたら帰る頃には腫れも取れるだろ」
ほぼ無理矢理に氷水で冷やしたタオルを目元に叩きつけた。腫れて熱を持っている目元にひんやりとする濡れタオルは気持ちいいようで、何度か交換しながら恵美チャンは帰るまでずっと目元を冷やしていた。俺は聞きなれた洋楽をＢＧＭに、久々にゆっくりとした時間が流れているなと感じていた。

確かに恵美チャンは告白してフラれちゃったけど、あの“自分なんて選ばれるわけがないんだから努力したって無理なのよ”の時期に比べたらそりゃすごい進歩だよ。まさかあれだけつついて凹まずに、こんなに頑張れる子だなんて思わないじゃん普通。
言い訳ばかりしている人間なんか数え切れない。そんな人間は、コンプレックスをつつくと必ず潰れていった。正直、恵美チャンだってそうなると思ってた。そして、以前なら確かに潰れただろう。だけど今は？　今の恵美チャンはほんと、目元は真っ赤で声は掠れてる。けど初めて会った時よりも確実に、格段に、恵美チャンは格好よくて可愛く見えた。

＊　＊　＊

あれから私は麗子にフラれたことを白状して失恋パーティーを開

いてもらったり、麗子と一緒にキャセルロットの常連になって暇さえあればいい香りがする紅茶を片手に何時間も居座り続けたり、結構満足した生活を送れていると思う。自分で決めた“前向きな姿勢で”ということも実行に移せてるしね。

ちょっとずつ前向きに前向きに、と頑張っていたら友達だって増えたし、今では冴田くんともいい友達に戻ってる。

うちの学校はバイト容認だからって、なんと私は宗谷さんにスカウトされてキャセルロットでバイトまでしはじめてしまった。始めてみるまではやっぱり怖かったしはじめてのことに戸惑ったりもしたけど、今じゃすっかり他の常連さんとも仲良くなった。こうやってバイトなんかで学校の友達以外の人と接する機会が増えると、改めて世の中にはいろんな人がいるんだなって考えさせられる。見た目とっても不良全開の人が、話してみたらすごく優しい人だったり。もちろんそんな人が全てではないと思うけど、こんな経験から前みたいに、話す前から怖がって自分から壁を作らなくなった。高校入学当時の自分はどこにいったんだろうって時々思ったりもするけど、今の生活はとっても楽しいから戻りたいとは思わない。

もちろん宗谷さんのあのテンションも相変わらずだ。いい年して喫茶店経営にばっかり夢中になってるから彼女の1人も出来ないんだよって進言したけど、お前も彼氏の1人くらい作れよって見事に切り返されてしまった。

別に彼氏の1人や2人いる……とは冗談でも言えないけれど。冴田くんだけじゃなくて他の男の子とも仲良くなれたし、失恋の傷ももう痛くないから、きっと誰かをまた好きになれるのももうすぐだと思ってる。

誰かをまた好きになれたら、今度こそめいっぱい努力してがっちり相手を捕まえて、宗谷さんを驚かすんだ。

それが今のところ、自分だけの秘密。

後編（後書き）

相変わらず長々とした文章になりましたが、最後まで読んでくださり本当にありがとうございました！
お時間があるようでしたら感想、評価などしてくださるとありがたいです。
今後のアドバイスとして受け止めさせていただきますのでよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3606a/

自分だけの秘密

2010年10月8日15時31分発行